

ヴィリエ・ド・リラダンにおける貴族の概念と文筆活動

木 元 豊

作者が貴族であるということが、読者にとって、ヴィリエ・ド・リラダンほど問題になる作家はいまい。ヴィヨンが泥棒詩人であるように、ジュネが同性愛者作家であるように、ヴィリエ¹⁾は、多くの読者にとって、貴族作家なのではなかろうか。少なくとも、彼を語るのに、彼の出自が13世紀に溯る名門貴族である（と、彼は信じていた）という事実を割愛するのは難しい。彼が貴族であるということと、彼の文学との関係は非常に深いのである。

この関係の深さは、単に彼が伯爵であるということに起因するのではない。彼が自己の貴族的態度の表明として文学を考えていたということが問題なのである。マラルメによれば、ヴィリエは自分の祖先の高貴さに新たな栄光を付け加えるために、大作家になろうと考えていたらしい。なぜなら、ヴィリエの意見では、大作家であるということは、彼の生きていた時代において、最も貴族的な栄光だからである²⁾。

貴族と作家を同一視するというのは、ロマン派的作家観として理解できるとしても、自明なこととは言えまい。しかし、ヴィリエにおける貴族の概念が孕む根本的問題は、この等号にあるのではない。問題は、たとえ彼が作家でなかったとしても、貴族であったということにある。彼が作家であることによって初めて得られる高貴さと、彼が祖先から受け継いだ高貴さは、別の次元に属する。にもかかわらず、ヴィリエはこの二つの異なる高貴さを等号で結んだ。問題はここにある。したがって、世襲による貴族と文学による貴族という二つの異なる概念の関係が、これから考察していく事柄の焦点となる。

世襲貴族と文学貴族

世襲による貴族と文学活動による貴族、この両者の間には、明らかな矛盾がある。前者が過去に固着した、閉じた概念であるのに対し、後者は未来に向かう、開かれた概念である。アラン・ネリは、ヴィリエの社会・政治思想を扱った論文の中で、この二つの矛盾する概念が、ヴィリエにおいて混在していることを、いち早く指摘している³⁾。が、残念なことに、彼はこの矛盾の孕む問題を過小評価している。彼によれば、矛盾は表層的なものでしかない。なぜなら、ヴィリエ

においては、世襲による貴族の価値も、指導者としての貴族的な行為によって維持されなければ失われるものであるし、逆に貴族の称号を持たない家の者も、長い年月にわたって培われた価値によって、指導者として貴族と同等の機能を果たし得ると考えられている、すなわち、ヴィリエは世襲的かつ機能的な貴族というものを想定しているからだ、というのであるが、ネリのこの解釈は、フランス革命に代表される歴史的断絶を完全に看過してしまっている。アドリーヌ・ドマールによると、貴族の称号は、元来、個人の存在に結び付いた属性と考えられていたが、19世紀にブルジョア社会が成立すると、貴族の称号は単なる装い、すなわち付けたり外したりできるものと考えられるようになってしまったという⁴⁾。世襲貴族の価値自体が、19世紀には失墜していたのである。ヴィリエが文学行為によって自己の貴族的価値を証明する必要があるのも、こうした歴史的背景があつてのことなのだ。世襲貴族と文学貴族は時間的に隔てられている。ネリの解釈はこの時間的差異を無視することによってしか成立し得ない。

では、この差異を考慮するとどうなるのか。二つの解釈の可能性がある。一つは、世襲貴族と文学貴族の間に連続性を見いだす解釈。もう一つは、両者の間に断絶を見いだす解釈である。

世襲貴族と文学貴族との間に連続性を見いだそうとすれば、両者を貫通する不変の要因を発見しなくてはならない。この立場の解釈をするダニエル・デルブレユは、それを神による保証に求める⁵⁾。彼によれば、ヴィリエにおける世襲貴族も文学貴族も神によって選別された者なのである。連続性を見いだそうとする限りにおいて、彼の選択は適切である。なぜなら、社会体制の変動を超えて、貴族を存在論的に保証できるものは、神以外にありえないからである。デルブレユの解釈によれば、ヴィリエにおける貴族＝作家の使命は神から得た真理を伝えることにある。したがって、貴族＝作家とは記号の真の意味を読み取ることのできる者でもある。ところが、世界は真理を知り得ない、虚偽を真実と信じている輩、すなわちブルジョアに支配されている。こうして、デルブレユは「呪われた詩人」を「呪われた貴族」に読み替えるのである。

デルブレユの解釈は確かに一貫している。が、一点だけ疑問の余地がある。ヴィリエの作品において、神による貴族の存在論的保証という考えが有効かどうかということである。我々にはむしろ、ヴィリエが文学活動による貴族の復権という思想を持つに至った根本的理由は、神が貴族の存在を保証してくれなくなったということにあると思われるのである。典型的な例を挙げよう。『未来のイヴ』⁶⁾である。

この作品において、英国貴族エワルド卿は、容姿は高雅な美しさの結晶であるが、心は卑俗というアリシア・クラリーに恋をし、彼女のこの二重性に絶望する。発明家エディソンは、自殺を決意した彼を救うため、姿はアリシアそっくりで、精神的にもエワルド卿の望み通りの人造人間ハダリーの製造に取り組む。アリシアがどのような女性であるのかを理解しようと、エディソンはエワルド卿に様々な質問を投げ掛けるのだが、アリシア分析も終わり近くに、彼女の家が最近貴族に加えられたことに関して、エワルド卿は「これが理由かもしれません⁷⁾」と言う。何の理由か。アリシアの二重性の理由であり、エワルド卿の絶望の理由であり、ひいてはハダリー製造の根拠となる理由である。『未来のイヴ』の創作理由といっても過言ではあるまい。では、何故アリシアの家が貴族に加えられたことが、これほど重要なのか。このことによって、アリシアが

表面的には完全な貴族になるからである。彼女は貴族を意味するあらゆる記号を持っている。しかし、精神的には貴族的価値を持っていないし、また理解もできない。貴族を示す記号とその意味の完全な乖離。これがアリシアの具現するものであり、エワルド卿の絶望の原因なのだ。したがって、ハダリー製造の目的は、まず、失われた貴族的価値の復権にある。が、それだけではない。アリシアの所有する記号はあらゆる貴族的なものを想定させるが、実際にはそこに貴族的なものはない。偽証なのである。ハダリーはこの偽証を正すという役割も果たさねばならない。ここで問題は複雑化する。一体誰が欺いたのか。アリシアではない。なぜなら彼女は正直過ぎるほど正直だからだ。エワルド卿は彼女の率直さを「シニックな無邪気さ⁸⁾」と呼ぶ。欺けるぐらいなら良いのだ。彼女の正直さがエワルド卿を絶望に陥れるのである。だから、彼女ではない。欺いたのは、「自然」なのである。アリシアに貴族的容姿や貴族の称号を与えたのは「自然」なのだ。したがって、アリシアの糾弾は、「自然」の背後に控えているであろう神の弾効へと発展する。『未来のイヴ』によれば世襲貴族の時代は終わったのである。もはや神は貴族的価値を保証してはくれない。存在自体に価値のあった時代は、神の沈黙とともに終焉した。それでも貴族的価値を保とうとすれば、虚構に頼らざるを得ない。これが『未来のイヴ』に見られる文学貴族生成の経緯である。

こうして我々は二つ目の解釈、すなわちヴィリエにおける世襲貴族と文学貴族の間に断絶を認めるという解釈に至る。この立場を取るものにベルトラン・マルシャルによる、マラルメとヴィリエの比較論文がある⁹⁾。

マルシャルによると、マラルメとヴィリエは、同じように、文学貴族の創造を夢見ていた。しかし、世襲貴族と文学貴族との間に否応無く歴史的断絶があることに気づいていたのに、ヴィリエは過去に、世襲貴族に固執した。それに対し、マラルメは断絶から出発し、常に未来に目を向けていた。その点で、マラルメの態度はヴィリエの態度より現代的である。非常に簡単に要約するとマルシャルの主張は以上である。

マルシャルのヴィリエに対する見解は、マラルメの見解を踏襲したものである¹⁰⁾。確かに、断絶を意識しながら、それでもなお過去に固執したのだから、ヴィリエの態度は時代錯誤的、あるいは退行的と考えられて仕方ないのかもしれない。しかし、『未来のイヴ』に見られるように、彼は断絶に対し非常に明敏な意識を持っている。その彼が、敢えてなお過去にこだわったとすれば、そこに独自の歴史観、文学観が働いているのではないか。このことをこれから考えてみたい。

自分になるための手段としての文筆活動

『筆貴族』と仮題されてプレイアド版全集に収められた断片の中で、ヴィリエは次のように述べている。

C'est, à quelque point de vue que ce soit, la plus morne, la plus nuisible pour soi-

même des stupidités de ne rien agir de grand, de ne rien tenter d'extraordinaire, de noble ou d'utile, sinon de sublime, sous le prétexte que tel de ses aïeux fut gouverneur des enfants du prince ou valet de la Chambre royale ou connétable de la France. Je trouve que l'on doit, si l'on est vraiment noble, le prouver par des actes nobles : autrefois c'était par de merveilleux horions, décernés ou subis, que l'on démontrait nettement ses origines. Aujourd'hui, c'est par un peu de pensée et de style que l'on peut, surtout, prouver que l'on est un *moi*⁽¹¹⁾.

この文章を、マルシャルは前出の論文の中で、ヴィリエが過去との断絶を意識していたことの証しとして取り挙げている。世襲による貴族ではなく、文学活動に基づく新たな貴族の到来をヴィリエは望んでいるというのだ。マルシャルのこの解釈は、ヴィリエがここに描き出した文筆活動によって自己の高貴さを証明していこうとする運動の、一つの局面だけを特権的に抽出しているように思われる。我々はこの運動に三つの局面を見いだすことができる。

一つは、マルシャルも指摘する、過去から未来へと向かう動きである。自己の高貴さは文筆活動によって作り出せるとするものである。しかし、また、逆の動きもある。過去へ、自己の源へと溯る動きである。なぜなら、文筆活動の末に現れて来るものは、自分がかつてからそうであったもの、自分の高貴な生まれであるからだ。こうして、過去と未来は、文筆行為の終点であり、また始点であるところ、すなわち文筆行為の現在において、一つのものとなる。この現在が第三の局面を形成する。未来に価値を与えるのも、過去の価値を再評価できるのも、現在の行為の価値いかなのだ。そして、ヴィリエは、全く無根拠に、文筆行為を価値ある行為と断定している。過去を救い、未来における選別を決定するのは、文筆行為の持続なのだ。ヴィリエによれば、貴族は書くことを通して貴族になるのだ。

不可逆的な歴史観に則ってヴィリエにおける現代性を議論すること自体、間違いではないにしても、場違いであるように我々には思われる。ヴィリエにおいては、現在という断絶から発して未来へ向かう動きは常に過去に溯る動きに裏打ちされ、現在に回帰するのである。この複雑な循環を可能にしているものこそ文筆行為なのである。この時間的円環の思想は、『未来のイヴ』という表題に明確に示されている。また、人造人間ハダリーの可能性とは、エワルド卿の恋愛の現在を永遠に持続させることにあったことを思い起こすべきであろう。

ヴィリエにおいて、文筆行為は、過去から未来への、世襲貴族から文学貴族への、単なる連続性を保証するものではない。書くという行為は、まず、歴史的断絶から出発している。しかし次の時点において、矛盾する二つの概念は、文筆行為特有の円環的歴史性によって、一つになるのである。

先に挙げた文筆行為の三つの局面は、各々、ヴィリエにとって文筆行為が持っていた三つの意味に対応している。未来へ向かう動きとして、それは自己創造である。過去に溯る動きとして、それは自己発見である。現在の行為として、それは自己肯定である。

文筆行為がヴィリエにとって自己肯定の役割を果たすことは、彼の文学における貴族の概念を

理解する上で非常に重要である。価値は肯定によって初めて存在する。ところが、先に見たように、神は、貴族であるヴィリエにとって、彼を積極的に肯定してくれるものではなくなっていた。それゆえ、彼は貴族であり続けるために、自分で自分を肯定するしかなかったのである。自己の肯定が、彼にとって文筆行為の果たした最も大きな役割である。彼が文筆行為を、全く無根拠に高貴なものとして断定していたことを思い起こそう。彼は書くことを無根拠に肯定し、書くことはこの肯定を肯定するのである。貴族の存在は、神の沈黙とともに無根拠なものになってしまっていた。それでもなお、貴族として、価値ある、高貴な者として存在し続けるには、自己の無根拠な肯定以外に方法がなかったのだ。ここから、ヴィリエが戯曲『反抗』に自ら付した序文を結ぶ、有名な文句が生じてくる。

Celui qui, en naissant, ne porte pas dans sa poitrine sa propre gloire, ne connaîtra jamais la signification réelle de ce mot¹²⁾.

ヴィリエにとって、高貴な者、すなわち貴族とは、自分自身を無根拠に肯定できる者に他ならない。自らの価値と栄光を自ずと持っている者だけが、価値と栄光を持つ者になれるのである。だから、貴族でない者とは、自分自身の価値を自ら否定する者、劣等意識を拭い去れぬ者なのだ。他人が価値を置く事柄を、他人が価値を置いたという理由だけでやっきになって追い駆ける自ら価値を制定できぬ者。その代表として、ヴィリエはブルジョアを指定する。アリシアがブルジョアなのは、彼女が、彼女が貴族と信じている者を真似ようとするからなのだ。

ヴィリエにおいて、貴族は自らの価値を自ら制定しなくてはならない。自分の価値を肯定する法を立てることが貴族の使命であり、ヴィリエにとって、それこそが文筆活動だったのである。書くことを通して、貴族は貴族に、「私」は「私」になる。『アクセル』の1872年以前に溯る草稿に見られる「人は誰しも自分自身にしか成らない¹³⁾。」というアクセルの言葉は、そういう意味に取られなければならない。

「私であった者」と「私であろう者」は、文筆行為を通して、「私である者」になる。しかし、「私である者」は文筆行為の終点であり、始点である断絶にしか現れない。だからこそ、自らの法制定をなし終えた後、「私である者」になるために、アクセルは自殺を決意するのである。アクセルの自殺は、自分自身から自分自身の力で生まれる方法、自分自身の最大最上の肯定なのである¹⁴⁾。ヴィリエの作品は常にこの最終的な肯定を基準に読まれなくてはならない。なぜなら彼にとって、書くとは自己を肯定することなのだから。もし彼の作品に肯定的要素より否定的要素の方が数多く見られるとしたら、それは法制定の際、既成の価値を破壊し尽くさねばならないからである。『アクセル』の四幕は、象徴的に、神殺し、兄弟殺し、親殺し、そして自殺に対応する。最初の三つの「殺」は否定であり、最後の「殺」は肯定である。なぜなら、アクセルは、神、兄弟、親が支配していた、そしてこれからも支配していきださう世界の勝者であり、そこにもはや用がないということが、彼の勝利宣言だからである。先に挙げた草稿の中で、自殺を決意したアクセルは、死後の世界と未来の自分を、次のように語っている。

Ceux que je vais trouver, s'ils sont dignes de moi, m'accueilleront en frères! Ils ne peuvent être plus tristes que les humains. Et s'ils le sont, j'emporte avec moi la force de les franchir, comme je franchis ce monde, en le poussant du pied. L'idéal est infini¹⁵⁾.

アクセルの死を通して、ヴィリエは新たなゲームに向かう。そこでの勝利を確信して。

以上のように、ヴィリエにおいて、貴族の概念と文筆活動の関係は非常に深い。過去に貴族が持っていた価値は、現在の文筆活動を通して初めて未来に保たれるからである。しかし、文筆活動は過去と未来の単なる連続を保証するものではない。それは、断絶から出発して断絶に回帰する円環運動である。その運動の中で、過去と未来は現在において価値付けられる。しかし、その現在に回帰できるのは、自己の価値を知っている者、肯定できる者、すなわち貴族だけである。自己を肯定できる者こそ貴族であり、生来の貴族だけが、文筆行為を通して貴族になれるのである。

こうしたヴィリエの考えは非常にニーチェ的である。しかし、ニーチェの哲学がヴィリエに影響を与えたと考えることは、不可能に近い。我々が考察したヴィリエの思想は、1872年以前に溯る『アクセル』の草稿に既に完成をみているのだが、1872年とは、ニーチェが『悲劇の誕生』を出版した年なのである。彼が「永劫回帰」の思想に到達するのはまだ先のことである。

注

- 1) ヴィリエ・ド・リラダンの名前は、日本ではリラダンと略することが多いのであるが、フランスではヴィリエとするのが普通である。本稿ではフランスの慣例に従った。
- 2) Stéphane Mallarmé, « Villiers de l'Isle-Adam », in *Œuvres complètes*, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1945, p.489 参照。
- 3) Alain Néry, *Les Idées politiques et sociales de Villiers de l'Isle-Adam*, Diffusion Université Culture, 1984, pp.314-315 参照。
- 4) Adeline Daumard, *Les Bourgeois et la bourgeoisie en France depuis 1815*, Flammarion, « Champs Flammarion », 1991, pp.174-182 参照。
- 5) Daniel Delbreil, « Villiers de l'Isle-Adam, l'aristocrate », in *Le Symbolisme en France et en Pologne (Médiateur et résistances)*, Varsovie, Editions de l'Université de Varsovie, 1989, pp.93-110 参照。
- 6) Villiers de l'Isle-Adam, *L'Eve future*, in *Œuvres complètes* (以下 O.C. と略す), Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1986, t.1, pp.763-1017 参照。
- 7) « Peut-être, même, est-ce la cause », *Ibid.*, t.1, p.813.
- 8) « une candeur cynique », *Ibid.*, t.1, p.803.
- 9) Bertrand Marchal, « Mallarmé et Villiers ou l'aristocratie du rêve », in *Romantisme*, 70, SEDES,

1990, pp.81-90 参照。

- 10) Mallarmé, *Op. cit.*, pp.497-498 参照。
- 11) « [Gentilhomme de la plume] », in *O.C.*, t.2, pp.984-985.
- 12) « Préface » à *La Révolte*, in *O.C.*, t.1, p.383.
- 13) « On ne devient que ce qu'on est », « Les Manuscrits » d'*Axel*, in *O.C.*, t.2, p.1466.
- 14) アクセルの自殺に関する我々の解釈に対しては多くの異議が唱えられることが予想されるが、我々の意見をここで例証していくことは、紙面の都合上難しい。ただし、先に挙げた草稿において、アクセルの自殺は「自分自身に成る」という考えに裏付けられていることを指摘しておこう。*O.C.*, t.2, pp.1466-1467 参照。
- 15) *Ibid.*, t.2, p.1467.